
とある青年の裏方作業(ハードワーク)

竜王 + 刀鍛冶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある青年の裏方作業^{ハードワーク}

【Nコード】

N1070S

【作者名】

竜王+刀鍛冶

【あらすじ】

学園都市にはもう一つ暗部組織があるのは知っているかい？
知らないなら教えてあげよう。
彼らの名前は。。。

学園都市にもう一つ暗部組織が存在していた。
彼らが戦う敵とはいったい…。

序章 彼らの名は The Unknown Group (前書き)

この物語は竜王さんと刀鍛冶の合作です。

更新は不定期ですのでよろしくお願いします。

序章 彼らの名は The Unknown Group .

学園都市某所。

一人の青年がソファーに深く腰を下ろしていた。

青年容姿は可もなく不可もなく普通といった感じだ。

しかしその表情は、長い髪で目元が隠れ分らない。

身長は百七十後半。

年の頃は高校生といったところか。

青年は人を待っていた。

しかし、いくら待っても待ち人は来ない。

青年はイライラしていた。

優しげな風貌に似合わず、青年は待つのが嫌いなのだ。

だが、そのイライラも解消される時が来たようだ。

「よう、待ったか？」

来たる待ち人の言葉通り青年は待った。

時間にして二時間ほどである。

青年はスツと立ち上がり振り向いた。

その先にいたのは、これもまた青年だった。

だが、印象は違っていた。

この青年は、柄物のシャツにスラックス、そして赤みがかった髪を立てている。

目は切れ長で、顔立ちは少々異国の血が混ざっていそうだった。

身長は百八十くらい。

そして、こちらも年は高校生ぐらいだった。

「まったく、遅い登場だな。お前まさか、僕が待つのを嫌っているの

を知った上で遅
れて来たのか？ とうか知ってるよな？」

青年は、殺気こそ感じないが、髪の間から見え隠れする目つきは鋭く、普通の人ならヒヤツとするだろう。

しかし、来たる待ち人はそれが当たり前のように、まるで意に介さず無視した。

この青年たちは、そんな世界に身を置いている。
来たる青年は言った。

「んなわけねーだろ。俺がそんなに賢く見えるか？ 俺と二年以上組んで知らないわけねえよな、運命？」

挑発めいた言いくさにも動じず、青年 鈴道運命（りんとくみちだめ）は言葉を返した。

「ああ、分かっているさ。お前は最強だが頭は悪い。だから僕がいるんだ。違うか、紅竜？」

運命の言葉に、背筋がゾツとするような笑みで来たる青年 日無（ひなず）消紅竜は答えた。

「で、ホントのところは？」

運命の問いに、紅竜はあっけらかんと答えた。
ちなみに、さっきのやりとりは毎回の約束というやつだったりする。

「んー？ ああ、道に迷っただけ」

「はあ…、またかよ」

呆れたように運命は言った。

どうもこの紅竜は、毎回同じ集会所だというのに道に迷うのだった。

しかも素で。

「ん？ 二人とも何をやってるの？」

「おや、何だか楽しそうですね。僕も混ざっていいですか？」

運命が紅竜のいつもの癖に頭を痛めていると、部屋に二人組が入ってきた。

片方は少女。もう片方は青年で、二人とも制服を着ていて、どちらも運命や紅竜と

同じく高校生だと分かる。

少女の髪型は濃い色の茶髪をボブカットにし、後ろだけ長い髪をポニーテールにしている。

目は大きめのアーモンド型で、鼻が通っており、いわゆる美少女だった。

身長は百五十後半といったところだが、ボディラインは細く、しかし、出る場所は

は出ていた。

そして青年の方は柔和な笑顔が特徴的だ。

背はあまり高くない、百七十前半といったところか。

髪型は前髪を右に流している。

少女の名前は断離風鈴。

青年の名前は珠洲乱夜継。

彼らもまた、運命と紅竜と同じ世界に身を置いているのだった。

「遅かったじゃないか」

運命のこの問いに、青年は微笑しながら答えた。

「ええ、すみません。委員会の仕事がありまして。でも、僕らはこれでも学生なん

ですし、そういう『表向き』の活動も重要ですよ？」

「ふっ、確かにな」

そのやり取りを聞いていた風飴は、静かに口を開いた。

「で、今日のお楽しみは？」

「いや、今日はないんだ」

「？ どういう事？」

「僕らが組んで、今年で三年目だ。という事で……」

『いう事で？』

「今日は、パーティーだ」

鈴道運命、日無消紅竜、断離風飴、珠洲乱夜継。

この四人で「クラウン」は構成される。

学園都市暗部の中でも秀でた存在。

だが一方で、ひた隠しにされていた存在でもあった。

今日を境に彼らは、さらなる抗争に巻き込まれる事になるだろう。

しかし、今宵は戦士たちの休息。

彼らにとって、この二年間は地獄だった。

だからこそ今がある。

それを彼らは噛みしめている事だろう。

第一章 青年は向かう ”Are you ready?” (前書き)

早くも第一章となりました。

本当に不定期に更新します。

第一章 青年は向かう ” Are you ready? ”

「そろそろか…」

青年、鈴道運命りんどうさだめは呟いた。

今は学校にいるものの、この後彼には予定が入っていた。
大した用ではないが、彼の性格的に断るといふことはないのである。

「あれ？ 先輩、何やってるんすか？」

運命が振り向くと、一人の少年がいた。

「何だ、上条か…」

黒い髪をツンツンヘアにした少年、上条当麻かみじょうとうまはおおげさに言った。

「あつ、その反応、ヒドいなあ。それで、どうしたんですか？」

「いや、ちよつとな。この後、人を迎えに行く予定があるんだよ」

運命の予定とは人を迎えに行くことだった。

運命はある組織に入っているのだが、上条はそれを知らない。

「へえ、どこまでですか？」

「いや、あまり深く聞いて欲しくないんだが…」

「大丈夫つすよ。俺、他人には話したりしませんから」

運命は少々渋ったが、上条の性格を知ってか口を開いた。

「霧ヶ丘女学院きりがおかじょがくいんにな…」

「霧ヶ丘！？ 何でまた？」

霧ヶ丘女学院とは、学園都市屈指の女子校で、希少な能力の開発をしている名門校として有名なのである。

「事情が重なってな、仕方がなくだ」

「へえ。でも、やっぱり人脈広いつすよね？」

「生徒会長さんともなれば」

そう、上条も通う第七学区の高校。

その高校の生徒会長こそが彼、鈴道運命なのであった。

「褒めたって何も出ないぞ？」

「いえ、思ったことを言っただけです」

「……、そうか」

「あ、俺このあと買い物行かなきゃなんないんで。また今度ゆっくり話しましょう」

「ああ、考えておくよ」

上条はその場を後にした。

その後ろ姿を見送ると、運命は上条とは逆方向、霧ヶ丘女学院の方へと歩き出した。

約二十分後。

「……か…」

運命はとうとう霧ヶ丘女学院に到着した。
そして、携帯電話でメールを打った。
相手はもちろん、今日迎えに来たその人である。
運命は返って来たメールを見て、悪態をついた。

「くそ…、何が待っててだ」

返ってきたメールには、こう書かれていた。

『とりあえず、門の前で待ってて。ちゃんと門の前じゃなきゃイヤよ？』

彼はあまり目立つのが好きではない。

ではなぜ生徒会長などをしているのかといえ、彼の相棒の**日無消**ひなげし
紅竜くりゅうの策略のせいである。

これは後に語るとしておこう。

キーンコーンカーンコーン。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

一気にざわめき始め、見る見る内に生徒たちが出て来る。
刺さる視線に怯みつつも、運命はひたすらに待つ。

彼はこの場において異彩を放っているため当然なのだが。
しかし、彼はふと他のものとは違う視線に気が付いた。

ん？ あれは確か…。

「君は…、結標じゃないか」

そこには、長い赤髪を二つにわけた少女がいた。

彼女の名前は**結標淡希**むすじめあわき。

『**座標移動**』ハイポイントと呼ばれる、**空間移動系**テレポートの能力を持った**大能力者**レベル4であ

る。

彼女もまた、学園都市暗部に身を置く存在であった。

「貴方は確か…、鈴道運命とかいったわよね？」

「ああ、しかしよく覚えていたな。会ったのはほんの数回、しかも会話すらした事

がないのにな」

「だって貴方、『裏』では名が通っているもの。いえ、貴方『たち』と言った方が

いいのかしら？」

彼女は、運命を始めとした四人で構成される「クラウン」の事を指しているのだから。

「別にかまわない」

「ところで、貴方はなぜここにいるのかしら？」

「ちょっとした…いや、結標なら言っても大丈夫か」

「？」

やはり、彼女も運命がここにいる事を疑問に思ったのか、問いかけてきた。

運命は話をぼかそうとしたが、結標の立場もあって話す事にしたよ

「風飴だよ」

「……」

今回運命が迎えにあがった人物は、同僚である断離風飴だったのだ。結標も意図を察したのか、やれやれと首を振った。

「あの人に言っておいてくれる？ 貴女人あなたの教室にずかずかと入って来て、一方的に

私にちよっかいを出すのはやめて。って」

「ああ、いちおう伝えるよ」

どうやら、結標は学校で風飴に遊ばれているようだ。きつと言っても言う事を聞くわけがない。運命は心の中で、すぐさま諦めた。

「私、このあと仕事が入っているから失礼するわ」

「例のか？」

「ええ、貴方たちに迷惑をかけないように努力するわ」

それじゃあ、と言って結標は門前に止まったキャンピングカーに乗り込み場をあとにした。

彼女も暗部に属する者としての任が下っているのである。

「お〜い、運命。何を突っ立っているの？」

感傷に浸る運命にかけられた風飴の一言は、彼の心に重くのしかかっている物を少しだけ取り去ってくれた。

「今夜は上からの任務がある。行く」

「分かっている。だからこそ、お前に迎えに来て欲しかったんだ」
「…そうか」

運命は微笑んだ。

しかし、彼に課せられている物は平然としていられるような物ではない。

だからこそ彼は強いのだ。

いや、彼らは強いのだ。

第二章 黒き翼を持つ者 First Enemy Contact . (前書き)

ついに第二章突入です。

いちおう不定期のはずです。

では、本編です。

第二章 黒き翼を持つ者 First Enemy Contact .

学園都市某所の一室に、四人の男女が集まっていた。

「よし、皆来ているな」

その中の一人、鈴道りんどう運命たためがそろった面々を見て言った。
彼は黒のスーツ姿で、今は黒髪をオールバックにしている。

「で、今日の予定は？」

運命の言葉ににまず最初に口を開いたのは、日無ひなげし消紅竜くりゆうだった。
赤みがかった髪をしており、服装はシャツにスラックスというものだ。

わくわくしているのか、髪と同じく赤みがかった目が爛々と光っている。

彼は四人の中で最も長く運命と組んでいる。
だから『間』というものを一番理解しているのだ。

「早く帰れるんでしょうね？」

次に口を開いたのは、珠洲すしゅう乱夜らんや継ついで。

柔和な笑顔が特徴的で、黒のブレザーを着ている。

「待ちくたびれたわ。さっさと要件をお願い」

最後に口を開いたのは、断離たちほな風飴かきめ。

彼らの中の紅一点、唯一の女性だった。

服装は、上は短いワンピース下はホットパンツだ。

今日はいつもポニーテールにしている髪を、一本の三つ編みにしている。

「よし、手短かに話そう。今日の仕事はいつもとは違う」

「いいですか？」

「なんだ、珠洲乱？」

「今日だけは特殊、という事ですか？」

運命の話に、夜継以外のメンバーも同様に不思議に思っていた。

彼らの普段の仕事は言わば『残飯処理』である。

学園都市暗部に蠢く他の組織、例えば『グループ』。

第一線で活躍する彼らにも小さなミスはある。

いや、第一線だからこそとも言えるだろう。

そして、その際に駆り出されるのが運命たち『クラウン』なのである。

「いや、今回からずっと変更になった。『グループ』とのツイートブだ」

「そうですね…。話をはさんでいません。どうぞ」

「ああ…。今回の仕事は、ある組織を潰す事だ。」

その組織の名前は、『神の御名において示す正義』。

どうやら、最近にぎやかになってきた『ローマ正教』の…。いや、魔術結社の一つらしい。

学園都市で預かっている『禁書目録』と、『幻想殺し』が目的だ

『禁書目録』とは、イギリス清教の有する十万三千冊の魔道書を脳に収める少女。

そんな彼女を危機から救ったのが『幻想殺し』というあらゆる異能・神の奇跡を消

しるる右手を持つ少年、上条当麻かみじょうとつまなのだ。

上条は「禁書目録」の魔道書を狙う数々の敵をその右手で打ち砕いてきた。

そのため、ローマ正教やいくつもの魔術結社に『神の敵』として狙われているのだ。

「そこで、僕たちが先手を打って「神の御名において示す正義」を叩き潰す。

これが今回からの仕事だ」

『……………』

運命の話聞き終わった彼らは、全員押し黙っていた。

彼らは統括理事長アレクスター「クロウリー」直属の部隊であるため、裏の事情は

耳にしていた。

およそ信じられる話ではなかったのだろうが、彼らは多くを見てきた。

だからこそ、その恐ろしさを知っているのだ。

「ふっ、そんなのやってやる。敵を潰してまた来たら潰す、それでいいんじゃないー

の？」

紅竜の言葉で、皆決心が付いたようだ。

「ふん！ 誰に物を言っている。私が怯むとでも？」

「僕は仕事が早く終わればそれでいいんですよ。早く終わらせるためにももう行き

ましよう」

「ははははっ、僕も含めてやっぱリイカれてるよ」

気付けば運命は笑っていた。

二時間後、四人がやって来たのは川沿いの工場跡。

「どこか…」

運命は小さく呟いた。

「おいおい、元気ねえぞ？」

「うるさいぞ紅竜。少しは考えなさいよ」

「楽しみすぎてじっとしてらんないっつーの！」

「もはや病気ね、その戦闘狂っぷりは」

運命に駄目出したした紅竜をたしなめた風鈴であったが、そういう彼女もはた目から

見て分かるぐらいうずうずしている。

彼らが統括理事長直属なのは先述したが、それには理由がある。

それは、彼らが『最強』^{ぜったい}であるという事。

彼らが学園都市の『超能力者』^{レベル5}というわけではない。

彼らは全員が『原石』^{ナチュラルキャパシティ}なのだ。

「原石」とは、言わば自然発生した能力者だ。

その総数は五十人前後と少ない。

そして幻想殺し上条当麻もその一人である。^{イマジンブレイカ}

他にも学園都市に何人かおり、その全員が稀少能力^{レアケース}でもある。

彼ら「クラウン」の面々は統括理事長の意図により、あえて未発表の存在なのだ。

「しっ！ 誰かいます」

『ッ……！？』

夜継の一言に緊張が走る。

そしてその指す先にいたのは修道服の集団。

人数は十人前後といったところか。

こうして見ると何とも異常な光景だが、今は夜も遅く人気はまったくない。

彼らが様子を窺っていると、途切れ途切れだが話す声が聞えて来た。

「……は、……か？」

「はい。……も……です」

「では、……に……する。配置に付け」

「はい」

息をひそめている運命たちには気づいていないようだ。

紅竜は運命に小声で言った。

「（どうする運命？ 今すぐ突っ込むか？）」

「（いや、向こうが動き出すまで待つんだ）」

「（だけど……）」

「（不意を狙う。いいか？）」

「（二人とも、申し訳ありませんが……）」

「（動くみたいよ！）」

その会話に夜継と風飴が割り込んできた。

どうやら「神の御名において示す正義」が動き出したようだ。

「（よし、行け！ 紅竜！）」

そう言うと、紅竜は勢いよくその場を飛び出した。暗い夜空に紛れて見づらいが、その背中には三対の漆黒の翼があった。

「待ってましたあああああああああ！！！」

「ッ……！？」

さすがに突然の乱入者に敵は慌てた。

しかし、リーダー格らしき人物がイタリア語で何か言ったところ、それもすぐに収まった。

そして、その人物は叫んだ。

「誰だか知りませんが、我らが主の御敵は我らの敵と同義！ 容赦はしません！」

口調は丁寧であるが、殺気のコもった声。対する紅竜も。

「細かい事はすつ飛ばす！ いいから俺の相手をしろお！！！」

その言葉の直後、ズドオオオンという轟音が鳴り響いた。紅竜が攻撃を仕掛けたのだ。

その紅竜の攻撃方法はいたってシンプルだった。ただ、翼を薙いだけ。それだけで圧倒的な破壊力を生み出したのだ。

「ったく派手にやりやがって」

「ええ、久々に見ましたね、彼の『ブラッククリア聖なる漆黒』」

紅竜の能力「ブラッククリア聖なる漆黒」。

イマジンブレイカこの能力は幻想殺しと同じく、未知の部分の多い能力である。

翼の一枚一枚にまったく違う能力が備わっている。

炎を操る「パイロキネシス発火能力者」。

水を操る「アクアノイト水力使い」。

電気を操る「エレクトロマスタ電撃使い」。

風を操る「エアロシユーター風力使い」。

このほか、新種の能力、

闇を操る「ゼロルラー虚無使い」。

光を操る「レイティアアント光冠使い」。

の二つ、都合六つの能力を彼は使用することができる。

現在、理論上実現不可能とされる『デュアルスキル多重能力』を行使出来る未知の能力である。

しかしこの「ふかのつ多重能力」も魔術の世界では可能となる。

この事実からも、紅竜の「ブラッククリア聖なる漆黒」が原石だからこそその恩恵と言える。

しかし、だからこそ覆る事実もある。

「…今のを食らって無傷ってどーいう事だよまったく」

未知の超能力を相手取るならまだしも、自分たちの使うまほう魔術と同じならばどうと

でも対処出来る。
つまり…。

「貴方あなたの使う力が何なんかは分かりかねます。ですが、私たちと似た領分ベースならば何の問題もありません」

「じゃあ、こつこつのはどうだっ!?!」

そう叫びながら騒乱に飛び込んだ運命は、いつの間にか左手に刀を握っていた。

前の話まで書きませんでしたでしたが、書かせてもらいます。

章題考えるのってムズい…

あと、一日に何話も考えるのって大変ですね…

愚痴をこぼしてすみません。

コメント・感想などお待ちしています。

また次回。

第三章目です。

定期更新してね?と思われる方もいると思います。

ですが、不定期更新を名乗ります。

とりあえず、本編へどうぞ。

「何っ!？」

突然の攻撃に男はとつさに避けた。

「期待してなかったが、避けられたか」

攻撃をした鈴道運命りんどうすなだめは、地面に突き刺さった刀を抜きながら言った。

「この威圧感…、まさか、有り得ないです」

「そんなにポーッと突っ立ってていいのかよ？」

「くっ!？」

さつきまで臨戦態勢にあった日無消紅竜ひなげしくりゅうの言葉に、男はスツと体勢を整えた。

そして男は口を開いた。

「貴方あなたがた、学園都市の人ですよね？」

「なぜそんな事を聞く？」

「いえ、貴方の持つその刀…」

運命は男の質問の意図を察し律儀にも答えた。

「この刀は、僕がこの左手で創り出した物だ」

「それはどういっ…」

「『レジェンドオーダー 神話創造』。それがこの左手の名前だ」

運命の能力「レジエンドオーダー神話創造」は、その左手よりあらゆる物質・法則・能力を作り出す事が出来る。

それはまさに神々の時代のように。
男は思案顔になったが、フツツと笑い言った。

「その名前…、分かりました。ここは一度退いた方が得策のようです」

「…なぜだ？」

「一つだけお教えします。その刀に宿っている力を我々はこう呼びます」

「天より授かりし聖なる力 『テレスマ天使の力』と」

聞き慣れない単語に運命は首をかしげているが、男は続けた。

「私は『神の御名において示す正義』代表代理、シアースト＝クリューネルです。
きつとまた会う事になるでしょう」

それでは、と男 シアーストはそう告げると、他の修道服の人たちと共に去っていった。

その場に残ったのは、臨戦態勢のままなすべき事が勝手に去ってしまっただけの場のない気持ちでいっぱい紅竜と、シアーストの放った単語がどうしても気になる運命だけだった。

翌日、運命は学校の生徒会室にいた。

例えどんな状況に置かれていても、彼らの本分は学生だ。

生徒会長をやっている彼だが、勉強が得意というわけでもなかった。

実際、名門の長点上ながてんじょうきかくえん機学園などに行ってもいいぐらいの能力者だが、

風飴のように

目立つ気もなく紅竜と共にこの学校に入ったのだ。

生徒会長になってしまったのもかなりの偶然イレキョウライだった。

(しかし、暇だな…。とは言ってもここを離れるのはちょっと)

彼がそんな事を考えていると、不意にドアをコンコンとノックする

音が聞こえてき

た。

(誰だこんな時間に?)

「はい。どうぞ、開いてますよ」

失礼します、という短い声のあと、ドアが開かれ一人の少年が入って来た。

「何だ、上条かみじょうじゃないか」

「どうもっす」

入って来たのは上条当麻かみじょうたつま。

『幻想殺し』という異能の力や神の奇跡さえも打ち消す右手を持つ

少年だ。

「どうした？ 僕に何か用か？」

「ええー、この前言ったじゃないですか。また今度って」

(ああ、この前霧ヶ丘きりがおかに行く途中に会った時の…本気だったのか)

そんな事を思ったのが顔に出ていたのか、上条は言った。

「もしかして、冗談だと思ってました？」

「いや、きつと来る頃だと…」

「その割にはくつろいでましたよね？」

「いや、それはだな…」

「さつき、『僕に何か用か？（キラーン）』とか言ってたじゃないっすか」

「どや顔で言うな！」

そんな上条に運命は溜息をつき、言った。

「はあ、で、本当は？」

「今日の放課後ヒマっすか？」

「ああ、多分な…」

「じゃあ、大丈夫だったら四時に玄関で落ち合いましょう。昼休み終わっちまうんで、俺教室に帰ります」

そう言い残して上条は生徒会室をあとにした。

（僕の放課後の予定なんか聞いて、本当に何の用なんだ？）

「お前って上条と仲が良かったの？ 今知ったんだけど」

上条の意図が掴めず、頭を混乱させている運命に声が掛かった。

「何だ、お前か…。で、お前は何の用だ？」

そこには、白の半袖セーラーに身を包んだ少女がいた。

お前呼ばわりされた少女は、ムツとしながら言った。

「お前には言われたくないけど?」

「僕も『お前』って呼んでくるやつには言われたくないな」

「ふん、仕方がないから呼んでやるけどな、鈴道」

「そうか、分かればいいんだ、芹^{せりあ}亜」

芹亜と呼ばれた少女

くもかわせりあ
雲川芹^{せりあ}亜は無然とした態度で言った。

「鈴道、いつ私が名前で呼んでいいと言った?」

「なら君も僕を名前で呼ぶといい」

「ふん、お断りだけど」

釈然としない気分の運命は、

(そんなに嫌なら毎回来なければいいのに…)
と、心の中で思っていた。

だが、上条同様雲川もまるで運命の心を見透かしたように言った。

「別に鈴道に会いに来たわけじゃないけど?」

「…なあ、僕って感情が顔に出やすいか?」

「出やすいけど」

(即答かよ! はあ、もうちょっと気を付けるか…)

そう心に決めた運命だった。

「で、何しに来たんだ?」

「保健室で寝られなくなつて、ここにたんだけど」

「……、……」

どうやら、雲川は保健室を追い出されたらしく、寝る場所を探しに

ここまで来たよ
うだ。

呆れた運命は冷たく突き放すように言った。

「ここはベッドも何も無いぞ？」

「いや、寝心地がよさそうな椅子が目の前にあるんだけど」

「おいおい、僕にどけてか！？」

「どうせ昼休みが終わったら出てくんでしょ？ それまでは待つけど」

「分かった、分かったから昼が終わるまで大人しくしてるよ？」

「ふん、そこまで子供じゃないけど」

二十分後、運命はきつちり昼休み終了のチャイムで書類の片付けを終えた。

雲川も、生徒会室にあるソファでまどろんでいたが、チャイムと同時に立ち上がり

ツカツカと近付いてきた。

(…だったらソファで寝てるよ)

と、運命は思ったが、努めて顔に出さないようにした。

「じゃあ、カギあとで返せよ？」

「分かった、早く行くといいけど。ふああ」

雲川に見送られ、運命は生徒会室をあとにした。

そして放課後　上条との約束の場所。

今日は珍しく仕事も入っていないので、約束を果たすべく時間通りに来た運命だっ

だが、視界の隅に何か留ったのでそちらを向いた。
そこでは三人の少年が、一人の少女に張り倒されているところだった。

「上条？ 何やってんだあいつ…」

その三人の中の一人が上条だった。

近付いてみると、少女の怒鳴り声が聞えてきた。

「上条当麻！ 貴様、また性懲りもなく…！」

「わ、私めは悪くないのでございます！ 悪いのはすべてこいつちみかこ土御門が…！」

「ちよつ、カミヤん！？ 何言ってくれちゃってるんだにやー！？」

「だって、お前があんな事言うから！」

「まあまあカミヤん。ここは冷静にいかへんとダメやる？」

『お前は黙ってる、青髪ピアス…！』

罪をなすりつけた上条に大慌てで叫んでいるのは、ちみかこもとはる土御門元春。
学園都市の暗部組織『グループ』の構成員だ。

彼は現在、イギリス清教を始めとするいくつかの組織のスパイなのである。

元は陰陽道のエキスパートとして、その道でも名が知れている。

しかし、スパイ活動のため魔術を使えない体と引き換えに学園都市に潜入したのだ。

彼の能力は無能力者の「レベル。肉体再生」。

そして、もう一人が青髪ピアス。

三大テノールもびつくりの低重音ボイスとエセ関西弁が特徴のやたらと守備範囲が
広い変態だ。

この三人は同じクラスでもあり、「デルタフォースクラスの三バカ」とまとめて形

容されることもある。

「きーさーまーらー！」

「うわわわわーっ！？ 吹寄、それは…、そこだけはマズって！
！」

「黙れ、馬鹿どもが！！」

「がつ！？」

悪さをした上条（あとの二人は先に逃げた）をとっちめしている少女は、吹寄^{ふきよせいら}制理。

上条たちと同じクラスの、健康オタク気味な胸の大きな少女だ。

運命は同じ暗部組織『クラウン』に属している、断離^{たちばなかさめ}風飴を思い出した。

（何か雰囲気とかが似てる…）

そして、いたたまれなくなり、仲裁に入った。

「君、吹寄さんだっけ？ さすがに離してあげなよ」

「あ、せ、生徒会長！ でも、この馬鹿たちが…」

「女の子がそんな乱暴な言葉を使っちゃ駄目だよ？（風飴みたくな
つちやうから…）」

「はい…」

「おおっ、あの吹寄がいとも簡単に…」

「う、うるさいっ！ それではその、し、失礼します！」

吹寄は以外にも食い下がらず、顔を真っ赤にしてバビュンとすごいスピードで帰っていった。

運命は嘆息しながら上条に言った。

「まったく、いったい何をやればこうなるんだ？」

「全然身に覚えがないんですけど…」

「ふう、まあいい。で、どこに行くんだ？」

「ちよつと遠いですけど、いいところがあるんでそこに行きましょう」

そう言うと上条は先に歩いて行ってしまった。

たぶん付いて来いという事なのだろう。

約十五分ほど歩いただろう。

運命が上条に付いて行くと、大きな公園にたどり着いた。

きつと上条の言っていることはこの事なのだろう。

ベンチに荷物を下ろした上条は、運命に言った。

「ちよつと待つててください。飲みもんでも買ってくるんで」

「分かった」

素直に言う事を聞いてベンチに座った運命は、上条のうしろ姿を見ていた。

次の瞬間に、運命は驚いた。

突然上条の横から電撃が飛んで来たのだ。

バチィツという音が遅れて聞えた。

きつと直撃すれば普通の人なら即死は間違いない。

だが、上条はまったくの無傷だった。

これも、「イマジンプレイカ幻想殺し」のおかげだろう。

「アンタ、やっと見つけたわよ！」

「ビ、ビリビリ！？」

「ビリビリ言うなっ！ 私には御坂美琴みさかみことっていう名前がちゃんとあるんだから！！」

「うおっ！？ 電撃を飛ばすなっ！ 危ねえだろうが！！」

御坂美琴と名乗る少女はお構いなしに電撃を放った。
学園都市で彼女の事を知らない人は少ないだろう。
学園都市序列第五位、レベルガン『超電磁砲』御坂美琴。
名門常盤台中学の超能力者とまわりたいちゆうがくのレベル5「電撃使い」である。

「どうせ、アンタには効かないでしょっ！」

「でも、怖ええモンは怖ええんだよ！」

「…あーもう、何でいつもこうなっちゃうかな。私は会いたいだけなのに…」

「何か言ったか、ビリビリ？ ほら、この尊大な心を持つ上条さんに話してみなさい」

「原因はアンタの鈍さよっ！！！！！」

それをただ眺めていた運命は、

（上条は女運がないんだな…。やっぱりあの右手のせいなのか？）
などと思っていた。

しかし、上条の「俺を助けてください」とい視線に気付き、まあ仕方がないかと

二人の元へ歩いて行った。

「元はといえばアンタが…！」

「私上条当麻わたくしが何をしたのでしょうか！？」

「ほらほら、喧嘩はよくないよ？」

そう言って割って入った運命に、美琴は思い切り「はあ、何よこいつ」という風に見ながら言った。

「アンタ誰？ ていうか何？」

「紹介が遅れたね、僕は鈴道運命。その上条君と同じ高校だよ」

「ふーん…」

「喧嘩の原因は知らないけど、こんな公園とはいえ街中で暴れるのはよくないと思

うんだ。ということで、喧嘩両成敗」

「いみゃっ!？」

「いでっ!?!？」

運命はあるうことが、美琴と上条の頭をチョップした。

当然プライドの高い美琴は眉をピクピクさせていて、臨界点突破間際のような様子だ。

「どいつも、こいつも何で私の邪魔するかなあ…!!」

そんな美琴の変化に気付いた上条は、こっそりと運命に言った。

「（今から全力で逃げれば振り切れるっ！ 3…2…1…ゴー!）」

「あ、ちよっ!?!？」

そうして上条と運命は全力で、後ろを一切振り向かず走った。

その後ろから、アンタ次に会ったら百倍にして返す。ついでにその馬鹿も一緒に。

という言葉が聞えてきたが、気にせず二人は走り続けた。

今回も読んで下さった方、ありがとうございます。

原作を参考にキャラを書かせてもらったのですが、変だったら

どんどん指摘お願いします。

次話もほぼ日常編でいきます。

感想・コメントなどお待ちしております。

では、また次回お会いしましょう。

第四章 その白き刃を向ける The Meet Again (前書き)

第四章目投稿させてもらいました。

大学があるので、これからもっと不定期になると思います。

ですが、よろしく願いします。

では、本編へどうぞ。

第四章 その白き刃を向ける The Meet Again .

「はあつ、はあつ……。もうここまで来れば大丈夫……の、はず」
「大丈夫か上条？」

「だい、じょうぶ、ですけど。はあ、はあ、だめっすよ、ビリビリにあんな事しちゃあ」
「余計な世話だったか……」

少しばかり落ち込む鈴道運命しんどううんめいに上条当麻かみじょうたけは続けて言った。

「いえ、正直うやむやになって助かりました」
「そうか、ならいいんだが……」

ありがとうございます。と上条は改めて言い、今度こそベンチに腰を下ろした。

すると上条はすぐ話し始めた。

「実は、先輩を呼んだのは頼みがあるからなんです」
「頼み？」

「はい。先輩の実力を見込んで頼みます」
「おいおい、実力って……。僕はお前に何か見せたか、上条？」

「こんなん言ってもいいのかわかんないっすけど、俺昨日見ました」

「工場跡に先輩がいるのを」

運命は、はつと息を呑んだ。

それだけ衝撃的な一言だったのだ。

『表』の人間に、一般人には知られてはいけない事のはずだ。

ましてや、狙われる張本人の上条に見られてしまったという事は、
運命としてはと

てもまずいのである。

きつと上条は自らこの厄介事に首を突っ込んでくる。
今までだってそうだ。

自らにはまったく利益がなかつと、自ら体を張って戦い、護り、
打ち砕いてきた。

どんな重傷を負っても。

たとえ記憶喪失になろうとも。

「その顔、やっぱり先輩なんですね……………」

「……………」

「この際気にはしません。とにかく、頼みを聞いてください」

「少し、考えさせてくれ」

運命はしばし考えた。

もしこの頼みを受けたら、運命も上条もあとには退けなくなるだろ
うと。

しかし、上条も敵も待つてはくれない。

この前は退いてくれたが、次はきつとない。

では、どうする？

どうすればすべてすんなりと終わるのか…………。

「よし、受けるかどうかは話を聞いてからだ」

「…………、わかりました。端的に言つと、インデックスを預かっても
らいたいんです」

インデックスとは、上条が記憶を代償に救った少女。

どんな異能の力も、神の奇跡をも消せるその右手で護った少女。

「僕がか？」

「先輩ならきつと護ってくれる。俺はそう思うんです」

「いや、違うよ上条。僕の力は人を守るための物じゃあない。

人を壊すための

物なんだ」

「そんなこと……」

「それにな、上条。僕ではなく、君が守るのが一番いいに決まっている」

「いえ、俺は……、俺は無力です。先輩のように特別な力があるわけでもない。イ

ンデックスの友達にさえ、救いの手を差し伸べられない。そんな男です」

「……、……」

運命はしばらく黙っていた。

どんな沈黙もいつかは破られる。

しかし、それを破ったのは運命でも上条でもなかった。

「どうやらお困りのようだな」

運命と上条の座るベンチ。

その後ろから声は響いてきた。

「ッ………！？」

上条はとっさに、しかしその場を飛び退きながら振り向いた。

だが、そこには誰もいなかった。

いたのは上条の後ろ。

上条のタイミングに合わせてぴったりと付いているのだ。

「悪いがしばらくは起きるな。一生とは言わない。だが、明日までは寝てる」

「がっ！？ ア、アンタは……」

突然の来訪者に、運命は驚くどころか、逆にほっとした声で言った。上条の後ろにいたのは、他でもなく運命が絶大な信頼を置く、日無ひなげ消紅竜しくりゅうだった。

そして紅竜は一切の迷いなく、手刀を上条の首元に放った。

上条はあっけなく気絶した。

もちろん上条が弱いとかではなく、紅竜が慣れているだけだ。

世界の裏側に棲む魔物。

彼等はその魔物たちを駆逐してきたのだ。

「悪いな紅竜。嫌な役をやらせてしまった」

「まあ、いいんじゃないの？ 上条が首を突っ込むよりは何倍もさ」

「そうだな。上条ばかりに嫌な思いはして欲しくない」

「そんな事言つて、土御門たちはいいのかよ？」

「そういう意味じゃないんだが、彼等にも悪いと思っっているさ。上司としてね」

そううつむきながら言った運命の目は、いったいどこを見ているのだろう。

まるで自分が騒乱の中心であるように。

それを察してか、紅竜はポンと運命の肩に手を置いて言った。

「お前が気にする事でもないんじゃないか？」

「……そうだな」

「落ち込むお前は嫌いだ」

それより、と話を切り替えて紅竜は言う。

「神の御名のもとに示す正義」との再度の戦い。
それが今夜行われるのだという事だった。

「前と同じ廃工場だ。さつき宣戦布告してきやがった」
「じゃあ行くか。つと、その前に上条の安全を確保してからか……」

そう言うと運命は、携帯でどこかに電話をした。
十五分ぐらいで迎えは来た。

いつぞやのキャンピングカー。

いつも「グループ」の使っている物だ。

そして、その中から降りて来たのは……。

「カミヤんを回収にきたぜい」

「私達はこんな事をするためだけに呼ばれたの？」

「まあまあ、いいじゃないですか」

「つたくメンドクせエな……」

つちかかどもとはる

むすじめあわき

つなほらみつぎ

アクセラレータ

土御門元春、結標淡希、海原光貴、一方通行の四人だった。

彼等四人を総称して「グループ」と呼ぶ。

今回の彼等の仕事は「上条当麻の安全を計る」事だ。

「すまん。お前等にしか頼めなかった」

申し訳なさそうにしている運命に、土御門と海原が返した。

「そんな下手にでないで欲しいぜい。オレだって、出来る事ならカ
ミヤんにはあま

りこういう世界には関わって欲しくないんだにやー」

「同感です。彼にはある人とその周りの世界を護るって約束しても
らいましたし、

今死なれると僕も困るんですよ」

運命は一通りの現状説明をして、彼等と別れた。運命と紅竜が向かうのは、いつもの集合場所。

前回と違い、「神の御名において示す正義」も準備をしている。不意打ちも意味がない。

そしてなにより、彼等は自分たちとはまったく違う世界にいるのだ。魔術と科学は相反する存在。

自分たちの常識も彼等の前では無意味。

だが、今回は「クラウン」のメンバーである断離風飴たちばなかざめも珠洲乱夜継すずらんごよつぐも後発だが、参戦する。

分が悪い、というわけでもない。

逆に二人が加わってくれるのは心強い。

しかし、運命から不安の種がなくなるわけではなのだ。

前回紅竜の攻撃が効かなかったように、今回も何かしらあるだろう。

「今夜は決戦だ。準備は？」

「万全」

「問題なしね」

「ええ、十分です」

運命の問いに各々《おのおの》答えた。

今夜は長くなりそうだ。運命はそんな事を考えていた。

彼等は最強ぜったいではあったが、究極むつきではない。

そんな事は重々承知の上だ。

だが、戦う。

彼等は学園都市の平穏を護るために存在している。

理由など一つあればいい。

そして舞台はこの前と同じ工場跡へ

工場跡、そこには前回よりも多くの修道服の人がいた。そして全員が思い思いの武器を持っていた。すでに臨戦態勢に入っている。

「クラウン」は、運命と紅竜の二人がいる。風飴と夜継は十五分後に合流する予定だ。

「またお目にかかれて嬉しいです」

「ふん、とんだ冗談だな」

運命の目の前にいる男、シアースト「クリューネルは言った。

「いいえ、本心です。この前は貴方あなたの御業を見せてもらいましたので」

「そんな大層な物ではないさ」

「ご冗談を」

鋭い口調でシアーストは続けた。

「それは、その左手は、『神』と同じ事が為せるのですよ？ かの

イマジンプレイカー
「幻想殺し」より

ももつと素晴らしいのです」

「僕は人間だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「上条当麻が主の敵ならば、貴方は主そのものと言えます。どうです、私達と来る

気はありませんか？」

「ふふふ……、はははは」

気付けば笑っていた。

運命は可笑しくて仕方がなかったのだ。
シアーストの言い種が。

「神？ 主？ そんな物知った事か！ お前等の主になれだど？
僕が？ はっ、お断りだね」

「……、本来ならば主を蔑むなど万死に値しますが、それも見逃しましょう」

言葉とは裏腹に、シアーストの目は怒りに燃えていた。
武器を持つ手に力が入る。

しかし、何かに気付いたようで、ニタアと笑いながら言った。

「いや、やはりいいです。いい案が浮かびました」

「その左手も「イマジンプレイカー幻想殺し」同様切り落として持ち帰ればよいのです
ね」

「ッ……」

さすがの運命も背筋に悪寒が走った。

切り落とすという言葉ではなく、シアーストの目。

先ほどまでの怒りに燃えた目ではなく、まるで自分の目の前では今まさに運命の左手を切り落としている。

そんな幻覚まで思い浮かぶ、恍惚とした、そして殺気のコもった目。
(こいつ、完全に狂ってやがる……！)
そして沈黙。

「……、っーかさあ」

長い沈黙を破ったのは、珍しい事に紅竜だった。

「早くやらねえか？ もうさ、この前からずーっと溜めてんだわ。ああ、もう無理だ。

我慢の限界。御託はいいからさあ、とつとと始めようぜ？ なあ？」

どうやら、この前逃げられてから今日まで、戦闘狂としての自分を抑え込んでいるようだ。

紅竜にはどうでもいい、まったくもって無意味な話だ。

一刻も早く戦いたい。

一瞬でも待てない。

紅竜が限界を超えて戦える相手は、学園都市にはほんの一握りしかない。
リミッター

たとえ一方通行でさえ勝てるか分からない。
アクセラレータ

実際、紅竜が全力を出して戦った相手はただ一人。

鈴道運命だけだ。

運命と紅竜と一緒に組んでいる理由は、対等であるから。

「なあ、俺と楽しもうぜ。早く楽しもうぜええええ！！！」

その咆哮と共に紅竜は舞い上がった。

暗い工場跡だからこそ見える星空。

その星の中に、三対の黒い翼を携えた墮天使が降臨する。

ゴツシャアという音と共に地面が深く抉れる。

その爆風により、近くの建物が半分吹き飛んだ。

暴れ足りない。

紅竜の思考にはその一点のみ浮かんでいる。

運命の叫びも、もはや遅かった。

「対聖人用迎撃霊装『グレイブニル銀狼をも結び止める鎖』、発動！」
「ッ、な、なんだ!？」

弾けた鎖は、一つ一つに術式が施され、相手に合わせ最適な形に変わる。

今回は十字架。

かつて聖人達が処刑される際に貼り付けられていた十字架。荘厳な雰囲気さえ感じさせる。

「があああああああああ!!!!!」

紅竜は脱出を試みるが、徒勞に終わった。

例え紅竜の翼の破壊力を持ってしても破壊は出来ない。
シアーストは鋭い口調で言った。

「貴方もいい加減目障りです。早急に消えて頂きましょう」

だが、運命がそれをみすみす見逃すはずもない。

「シアースト！ 僕が相手になってやる！ この左手が欲しいんだろ!！」

叫ぶや否や、運命は駆け出した。

腰に当てた左手に、右手を添える。

まさに居合の構えのごとく。

シアーストまであと三メートルのところ、運命は思い切り右腕を横に薙いだ。

「ふっ!!」

その右手には、刀身から淡い光を放つ、純白の刀が握られている。その淡い光の正体こそ、刀に入り切らない「天使の力」テレスマの残滓なのだ。

この刀こそ「神話創造」レジエンドオーダーの生み出した第二形式「一心一刀」スラッシュエンドだ。

真空波のようなものが、シアーストの体に吸い込まれるように向かって行くが、寸

前で避けられてしまった。

二太刀目は右からの袈裟切りけさ。

三太刀目は左下段からの払い薙ぎ。

しかし、シアーストは華麗に避ける。

「くっ……」

「甘いですよ!!」

シアーストは持っていた剣で反撃してきた。

ギインという接触音が何度も辺りに響く。

そして、拮抗状態へ。

「確かに貴方の刀には『天使の力』テレスマが宿っています。しかし、扱ひ方が分からなければ、宝の持ち腐れです!」

「(ただ振り回すだけじゃ駄目なのか……)」

そしてシアーストは、この状況では最悪にも近い一言を放った。

「あそこにいる男を先に狙いなさい。霊装の『絶対神の神鏡』ゲンゲニルを使えば大丈夫です」

「貴様! 動けない相手にそれはねえだろうが!!」

「そんな事はないです。彼は主の敵なのですから、当然です」

「くそっ！！ 紅竜！っ、逃げる！！」

「ククク、やりなさい」

無情にも、修道服の一人の手によって「絶対神の神鍵ゲンゲニル」が投げられた。

紅竜の無残な光景が目には浮かぶ、と思っていたシアーストだが、実際は違っていた。

紅竜には一切の傷はない。

それはなぜか。

紅竜の前には、「絶対神の神鍵ゲンゲニル」が右脇腹に深々と刺さった、上条当麻がいた。

「あ、か、上条おおお！！！！！！」

第四章 その白き刃を向ける The Meet Again (後書き)

このたびも読んで下さった方、ありがとうございました。

前回からの続きだったので……、とても難しかったです。

とくに場面転換に手こずってしまい、だんだん章が進むにつれ長くなって来てしまいました。

またもや愚痴っぽくなってしまいましたすみません。

第五章が終わったら番外編書く予定です。

コメントや感想いつでもお待ちしております。

では、また次話にて。

不定期投稿と言いい張ります。

今回は少々手こずりました。

内容移行も大変だったのですが、最も大変だったのは。

時間がない、という事です。

大学の授業があるので、さらに不定期になる事間違いない！！

内容が前回と比べて薄いなーっと思われるかもしれませんが、そこはご勘弁。

とまあ、戯言はさておき、本編をお楽しみください。

第五章 その瞳に映るもの Start | Re | Genesis .

「がはっ……………」

血に濡れる脇腹に刺さった霊装「絶対神の神鎧」に上条当麻は軽く触れた。

その途端、霊装は塵と消える。

そして、血を吐きながらも上条は喋り出した。

「日無消先輩……………、今壊します」

フラフラと覚束ない足で日無消紅竜の元へ歩いて行く。

「銀狼をも結び止める鎖」を破壊するためだろう。

彼の右手「幻想殺し」ならば容易い事だ。

どんな魔術もどんな霊装も、上条の前では紙で出来た物となんら変わらない。

そして「銀狼をも結び止める鎖」は上条が触れると、砕ける音と共に消え去った。

それと同時に、上条は地面に崩れ落ちた。

鈴道運命はとっさに、解放された紅竜に言った。

「紅竜！ 上条をあ病院へ……………！」 『冥土帰し』のところに！！

「ああ、任せろ！」

「冥土帰し」とは、第七学区の病院にいる医師である。

その名の由来は、彼にかかればどんな瀕死の重傷だろうと死の淵から呼び戻すというところからだ。

彼に任せれば確実に治るのだ。

だが彼も、唯一上条の記憶だけは取り戻す事が出来なかったのだ。だが、彼にとつて今の上条の傷は朝飯前だろう。

だからこそ運命は紅竜に行かせたのだ。

「ふっ、そうはさせませんよ！」

「それはこっちのセリフだ！！」

ギインという音と共に、運命とシアーストの間に火花が散る。

運命の持つ刀「一心一刀」と、シアーストの持つ霊装「光の神を討つ剣」がぶつかり

合っているせいである。

だが、運命の刀が本来の力なら、シアーストの霊装を切り裂く事など容易いのだ。

しかし、運命は違う法則の力を表面上しか理解していないため、本来の「天使の力」

を引き出せないのだ。

だからこそその互角、拮抗状態なのである。

その拮抗も、破られる時が来た。

「うおおおお！！！」

「くっ！？」

剣尖がぶつかり合い、火花が飛び散る。

シアーストは剣を交えながら、ふと違和感を感じた。

（天使の力が……、増している？）

しかし、運命にさつきと特に変わった様子は見受けられない。

では、何が違うのだろう。

（違う、これは天使の力ではない……？　しかし、それでは理屈が合いません。そも

そもそもこんな力は他にありえないはず……。いえ、絶対にありませ…
…)

「プレステイアース
神の片鱗」

この一言で、シアーストの違和感がすんなりと収まる。

しかし、人にあつていい力ではない。

神の片鱗を持つ人類はいない。

それが、神を崇める彼等の考えだ。

もしいるのなら、キリストと同様に崇めなければならぬ。

そんな人を傷つけるなど、言語道断の行いだ。

「覚悟は出来ているんだろうな？」

「私には貴方にやられる理由がないのですが？」

「ふん、戯言さわごとを。シアースト、お前がやった事は許されぬぞ。たとえ神が許した

としても、僕が許さない」

「そうですね……。ならば仕方がないです。私も全力で……」

シアーストは言いかけて、視界の隅の異変に気が付いた。
右手。

運命の右手にも刀が握られている。

彼の激情と共に、新たな力が生まれたのだ。

レジエンドオーダー
神話創造第三形式「デイメイス天崩」。

それが新たな力の名前だ。

「ここからは、全力で殲滅する！！」

「見くびらないでほしいですね！」

先ほどまでと同様に互いの武器がぶつかり合い、激しい閃光の波と

なつて押し寄せ
せる。

しかし、力の差がはつきりして来た分、運命に有利なのは確かだ。神話に出てくる物より、神話を創った方が優位なのは当たり前である。

威力は二刀に分散されているが、その分の手数の多さは比ではなかった。

まさに、怒涛うとうの嵐のような攻撃。

それを防ぎきるシアーストも相当の手練れである。

だが、しよせんは一介の人間。

神に抗う事は出来ないのである。

「（……ですが、妙です。これほどの威圧を前にして気圧されるのは分かりますが、
援護の一つもないのはおかしい）」

シアーストのそういった心の機微に気付いてか、運命は言った。

「ああ、お前の部下ならもういないぞ？　もう片付けたからな」
「何っ!？」

運命の一言にシアーストは辺りを見回した。

だが、「神の御名において示す正義」の部下の姿はなかった。
代わりに二人、人影が立っている。

「遅かったな、風飴かため、珠洲乱たましい」

「ふん、だったらお前がやればいいだろう、運命」

「いえ、これでも早い方ですよ。あの方達変な攻撃してきましたし」

儼然とした態度の少女は、たちはなかざめ断離風飴。

柔らかな笑顔を浮かべるのは、すずらんやししく珠洲乱夜継。

「クラウン」の構成員だ。

「神の御名において示す正義」のシアーストを除くすべてを蹂躪じゅうりんしてきたのだ。

その圧倒的な戦力差によって。

彼等の前では、人数など関係ない。

自分より強いかわ弱いかのどちらかだけだ。

「ふつ、貴方達学園都市を、少々過小評価していたようですね」

「言ってる」

「では、今日もそろそろ帰らせてもらいましょうか」

そう言うが早いか、シアーストは夜の闇に消えていった。

「くそっ！！ また止めを刺せなかった！ しかも、後輩まで巻き込んだ……」

「おい運命、そう気を落とすな。それじゃあ上条に合わせる顔もないだろう？」

「そうですね。上条君が割って入ってしまったのは、不慮の事故です。アナタに落ち度はないんですよ」

「……………」

風飴と夜継が慰めをかけるが、運命にその言葉は届いていなかった

……………。
（……………僕がもつと安全な策を取っておけば、こんな事にならなかったかもしれない。

奴等を甘く見なければ、こんな事にはならなかったはずだ……………）
運命は自分を責めていた。

こうなったのも、すべては自分の責任であると。

一方、第七学区の病院。

「君は外に出ていたまえ」

「ですが……！！」

「ここは僕の戦場だよ。君の気持は痛いほど分かるが、僕を信用しなさい」

「しかし……」

ヘウンキヤンセラ

「『冥土返し』の名前の意味を知っているだろうか？ 僕の目が黒い

うちは、誰だろう

と死なせはしないよ」

「……はい」

カエル顔の医師はそう言って紅竜をなだめた。

彼の言うとおり、彼に任せれば死者も甦ると言われるほどの実力の持ち主だ。

だが、紅竜は自身に責があると思ひ込み、自失しているのだ。

今まで彼は、どんな窮地も自力で脱してきた。

他人に背を預ける事はあっても、他人に守ってもらう事などはなかった。

運命でさえもなかった。

（俺は、何をしてるんだ……？ 上条に……、守るべき存在に助けられて、何が最強

だ。俺は、自分の身さえ守れない最弱の男だ）

彼もまた、運命と同様に心にヒビが入っているのかもしれない。

だが、そんな二人も上条に心を救われるとは思っていないだろう。いや、上条自身も知るはずはない。

この瞬間から新たな神話が紡がれるとは、まだ誰も知らない。

紡ぎ手となった彼等の日々。

彼等の前に敵がいる限り、彼等に安息などありえない。

だが、歯車は動き出した。

数か月後に、さらなる戦火が待ち受けている事も当事者たちは知らない。

未来など、簡単に変わるのだから。

イタリア某所。

「シアースト、よく戻った」

「はっ、主教練」

「学園都市はどうだ？ 成果はあったのか？」

「はい。『イマジンプレイカー幻想殺し』に代わる、新たな神の御業を見つけました」

「ほう、それは真か？ ならば、いかような……」

「まさに、神の片鱗。プレステイアース鈴道運命、彼ならば神の御名に相応しいでしょう」

「よう」

「では、私も出よう」

「主教練自らお出でで!？」

「ああ、私も少々鬱に入っていたところだ」

「はっ、では御支度をいたします。こちらへ」

「くくっ、楽しくなりそうではないか」

闇に光るその瞳は、まるで獣のように爛々としていた。

第五章 その瞳に映るもの Start | Re | Genesis (後書き)

ふう、やっと敵勢力の主教登場です。

これからどんどん場面転換が激しくなるとは思いますが、そこは笑って見逃していただけると助かります。

今回は番外編です。

感想、コメントなどお待ちしております。

それでは次回。

どうも、刀鍛冶です。

読んで下さった方ありがとうございます。

今回は番外編となっています。

今回の展開は、面白いかどうかは読んだ方次第ですのでその面はよろしくおねがいします。

では、本編へどうぞ。

「失礼します」

礼儀正しく職員室に入って来たのは、生徒会長である鈴道運命りんどうきよなみだつた。

今日はこの高校における毎年恒例の学校行事、「学芸発表会」なるものが行われるため、職員室にいるはずの生徒会顧問のところに来たというわけだ。まあ、つまりはミニ「いちほなちんさい端覧祭」といったところだ。

「あれ？ いないのか……」

しかし、職員室を見回しても、顧問の姿はない。

仕方がないので、近くにいる女性教員に聞いてみる事にした運命であつた。

「あの、ちよつといいですか？」

「ん？」

「はい？ あつ、鈴道ちゃんじゃないですかー。どうしたですー？」

「先生達にちよつとお聞きしたい事が……」

「なんですかー？」

「言ってみるじゃん」

このとてもじゃないが成人には見えない人は、この学校で有名な、

ある意味珍生

物の月詠小萌。つくよみこもえ

そして、その隣にいるのは、美人でジャージの上からでも一目で分

かるダイナマイ
トボディを持っている、しかし、完璧に体育会系である黄泉川愛穂。よみかわあいほ
二人を同時に見ると、あまりのギャップに言葉を失う人が続出する
という、仲のいい先生二人組だ。

「生徒会顧問の弓野先生はどちらに？」

「弓野先生ですー？　そうですねえ、黄泉川先生は知ってるですか
ー？」

「んー、知らないじゃんよ」

「そうですね……。ありがとうございました。それじゃあ、失礼しました」

仕方がなく運命が職員室をあとにしようとすると、後ろから待った
がかかった。

「ちょっといいですか？」

「？　何ですか、小萌先生？」

「もしかすると、人手不足じゃないんですかー？」

「あはは……。分かつちやいました？」

「毎年この時期に顧問に相談するのは、そういう事が多いじゃんよ」
「お恥ずかしながら、生徒会の運営もなかなか難しくですね……」

現状、この学校の生徒会は人手不足なのである。

役員は全員が二年生以上なのだが、だいたいの人が補習や受験勉強
に追いやられて
いるのだ。

この高校は偏差値が低めなので、今から頑張らないと後々苦しくな
るというので仕
方がなくはある。

「あ、だったら先生のクラスの口をお貸しするのですよー」
「確かに、月詠センセのクラスはいつも元気が有り余ってるじゃん」
「ほら、噂をすれば……」

運命は小萌先生の見方に向いた。

すると、そこには小萌先生のクラスかみじょうとつまの生徒である上条当麻、つちみかど土御門

もちはる元春、青髪ピア

ス、ふきよせせいり吹寄制理、ひめがみあいさ姫神秋沙の五人がいた。

そして小萌先生は、ちっちゃな体全体を使ってぴよんぴよん跳ねながら、その五人を呼んだ。

「おい、上条ちゃん。それと、皆もこっちに来るのですよー」

その呼びかけにゾロゾロと歩いていた五人は、目的地を変更して運命たちの方へ何

やら喋りながら歩いてきた。

ちなみに、五人の会話内容はこうだ。

上条「ん？ 小萌センサーが呼んでる」

土御門「カミちゃん、また何かやったのかにゃー？」

青髪「小萌センサーは今日もかわええなあ」

吹寄「上条当麻！ 貴様また問題を……」

姫神「でも、何か今日は違うみたい。生徒会長もいるし」

上条「ありゃ？ ホントだ」

吹寄「まさか貴様、鈴道会長にまで迷惑を……！」

姫神「気付かぬうちに何かしでかした？」

土御門「カミちゃんがトラブルに巻き込まれない確率が皆無なところを考えると、そ

の可能性もありだぜよ」

青髪「まさか、会長さんの女を……!?!?」

上条「俺ってそんなに信用ないのかよ!?!?」

上条他全員「だって、カミヤン（上条）（上条くん）だし……」

上条「俺って……、俺って……。不幸だ……もごもご」

吹寄「職員室では静かにしろ!」

青髪「しかし、黄泉川センサーもええなあ……」

普段から信用のない上条であった。

そして青髪ピアスは、どうしようもなかった。

やって来た五人（上条は落ち込んでいる）に小萌先生は言った。

「今日ですね、上条ちゃんたちにお問い合わせがあるのですよー」

「俺等に、ですか?」

「はいー。生徒会のお仕事を、手伝ってあげてほしいのですー」

「生徒会の?」

「鈴道が困ってるじゃんよ」

「なのですー」

上条は意外そうな顔をしていたが、状況を飲み込んだのか運命に確認を取ってきた。

「へえ、そうなんですか?」

「ああ、人手不足だね。少し困っていたんだ」

「なら、俺たちが手伝いますよ」

「本当かい?」

「もちろんです。先輩にはお世話になってますから。なあ?」

上条が四人に問いかけると、各々了解の言葉を言った。

小萌先生のクラスの生徒は物わかりがいいのだ。

「って事で、オッケーっす」
「助かるよ。では、早速生徒会室に来てもらおうか」
「はい」

場所を移して生徒会室。

「では、まず君たち男子は、三階西の第二資料室に一緒に来てもらおう」

「何か運ぶ物でも？」

「去年までの学芸発表会の資料が沢山あってな。さすがに一人では持ちきれないんだ」

「よっしゃあ、いつちよやりますか」

「じゃあ、吹寄さんと姫神さんは、その資料の整理をお願いするから待っててね？」

「あ、はい」

「わかりました」

運命は男子三人を引き連れ、資料室へと向かった。

上条、土御門、青髪。ピアスはバカだが、力仕事は任せとけ。の、若き血潮を滾らせた、青春真っ盛りの高校生なのだ。しかも単純でもある。

目的地に向かい、しばらく歩いていると、上条が声をかけてきた。

「あの、鈴道先輩」

「何だ、上条？」

「去年は何やったんすか？ 俺、去年はいなかったんで分からない

んですよ」

「実はオレも気になってたんだにゃー」

「ボクもボクも」

今年から入学した上条たちがそんな事を知るわけもなく、当然のごとく運命に聞いてきた。

実際、こういった学校行事がある学校は稀だったりするのだ。

高校生活を楽しむべく、先人たち（そんなに遠くはない）が生み出した楽しい楽しい祭りなのだ。

「そうだな、一年のお前らが知らないのも無理はないな。そうだな、簡単に模擬店

とかレジメを発表したり、あとは体育館で企画物をやったり、要は普通の高校の文化祭と同じだよ」

「へえ、やっぱり一端覧祭に近いんですね」

「まあ、一端覧祭の前哨戦だと捉えてくれればいいよ」

「なるほど……」

内容を確認した上条たちは、早速自分たちのクラスで何をやるかの談義を始めた。

当然のごとく、「やっぱりメイド喫茶がいいぜよ」「いや、やはりここはコスプレ

喫茶やる！」「上条さん的にはあえて展示物にして、他を見て回る方がいいと思う

のですよ」「いや、メイド喫茶だにゃー！」「何といつても、セーラー服、バニー、

巫女さん、婦警さん、看護婦さん、フライトアテンダント、チャイ

ナ服、スーツ、着物、ドレス、スク水、ビキニ、シスター、ジャージ、軍服、鎧兜、甲冑、ボンテール、猫耳、犬耳、被り物、宇宙服、葉っぱ、髪、全裸など、もちろんその中にはメイド服も入って……」などという変態の応酬だったりするのだが……。実際、近くで会話を聞いていた運命は頭を抱えなくなったとか。

「じゃあ、気を取り直して、この段の端から二段下までの全部持っていくてくれるか？」

「お安い御用ですよ」

「場所は生徒会室まででいいのにかにゃー？」

「そうだな……、うん。生徒会室で大丈夫だ。持っていくたら中身を出して、吹寄せさんと姫神さんにまとめるように伝えてくれるかい？」

「鈴道先輩はまだ来ないんですか？」

「ああ、悪いが、資料室の整理もしていききたいから。案外来る事も少ない

しいい機会だからな」

「分かりました。先に戻ってますね」

「頼んだぞ」

こうして上条たちは、資料室をあとにした。残ったのは運命だけ。

運命は軽く伸びをして、それじゃあ、と言って片付けを始めた。

一方、生徒会室。

「いやー、やっと着いた」

「意外に重かったぜよ」

「たまには運動せなあかんわ」

「おい、吹寄ー。手え離せないからドアを開けてくれー」

「……」

「あれ？ いないのか？」

「おい、姫神ー。いない……」

ガチャ。

最初は沈黙が返って来たが、二度目はすぐにドアが開いた。中から顔を出したのは、姫神だった。

「静かに。吹寄さんが寝てるから」

「寝てるって、えー」

「きつと疲れてた。いつも上条くんたちが迷惑かけるから……」

「いきなり犯人扱い!？」

「だまって」

「あー、はいはい。すまん」

上条は音を立てないように、極力静かに生徒会室に入った。

入って右にあるソファを見てみると、もたれかかるように吹寄が寝息を立てていた。

見たところ起きる気配はなく、いわゆる熟睡というやつだった。

実は疲れていたのではなく、緊張から来るものだという事は、吹寄以外の誰も知らない。

そんな事を知る由もない上条は、荷物を下ろして姫神に運命からの伝言を伝えた。

そして、自分たちも吹寄の代わりに作業を始めた。

彼等には珍しく、無言の一時。

平和な日々の午後は、何一つ問題なく過ぎてゆく。

上条は、こんな日はいつ以来だろう？

と、考えていた。

ここ最近の上条は、ずっとトラブルに巻き込まれ続けている。

いや、実際はトラブルに自ら突っ込んでいるのだが。

それでも、上条にとっても誰にとっても、静かな日々は何か思うところがあるのか
もしれない。

上条は思った。

（俺もインデックスに会わなかったら、普通の高校生だったのか？

もし、この右手

がなかったら幸せな人生を送れたのか？ いや、違うな。たとえば何の繋がりもなかる

うと、俺は勝手に助けていた。だけど、学園都市に来ていなかったとしたらどうなった

ていた？ 幸せに日々を過ごしていたのか？ いや、そうじゃね

ーだろ上条当麻。

そんな『もしも』の事なんて考えてんじゃねえ。大切なのは、『今どうするべきか』

だろ？ そんなくだらねえ幻想は、自分自身でもぶち殺す（

上条は静かに微笑んでいた。

今ある『幸せ』を噛みしめるように。

一人の少女の笑顔を思い浮かべながら。

「よし、まとめ終わったしそろそろ帰るか？ …… つつても鈴道

先輩が来ないんだ

よなあ。先に失礼して帰っちゃうか？」

時間も過ぎ、作業が終わった上条たちだが、どうも運命が帰って来

ない。

とつくに資料室の整理は終わっているはずなのだが、いつまで経っても戻らない。

うーん困った、などとぶつくさ言う上条に、すでに目が覚めていた（結局目が覚め

るのに、一時間弱を要した）吹寄が言った。

「こら上条！勝手に帰るなどダメに決まっているだろう！」

「じゃあ誰か探してくる？」

「はいはい。やっぱりここは平等にジャンケンで決めるべきだぜい
！」

「ボクもその意見に賛成や」

「それなら公平」

「ふん、仕方がないな」

吹寄も折れたところで、第一回「鈴道先輩を探しに行くのは誰だ」杯、大ジャンケン大会となった。

結果、運命を探しに行くのは、当然ながら不幸体質上条となった。

だが、なぜか吹寄が「し、仕方ないから私もいつてやる」などと言
い出したので、

結局上条と吹寄の二人で探す事になった。

「あれ？資料室にはいないか……」

「職員室にもいないじゃない」

「教室にもいないな」

「保健室にも……、って何で保健室なんだ貴様！」

「屋上にもいない。となると……、いったいどこに？」

二階応接室。

「なあ風飴^{かざめ}、なんだって僕の学校に来たんだ？」

風飴と呼ばれた少女　断離^{たちはな}風飴^{かざめ}は、ふっと笑いとても尊大な態度で言った。

「運命、この間はお前が私の学校に迎えに来ただろう。だから今日は私が迎えに来てやったのだ。感謝しろ」

「いや、有難迷惑だよ？　しかも、それ恩の押し売りだよね？　と
いうか連絡もなしに来るなよ……」

「ん？　何が不満なのだ？」

「いやもう、何もかもが」

「そうかそうか」

「なぜそこで嬉しそうな顔をする！？」

「何を言う、私はご立腹だぞ。プンプン」

「棒読みで言うな……」

今から一時間ほど前。

資料室の整理をしていた運命の元に、小萌先生がやって来た事が発端である。

どうも、運命にお客さんが来ている、との報告を受け応接室まで来た運命はガッカリすることになる。

小萌先生がいやにニヤニヤしていた理由はこれかと気付くのはもつとあとなのだが。

「運命の学校は小さいな」

「うちを名門の霧ヶ丘きりがおかじよがくいん女学院と一緒にするなよ」

「でも、あそこ案外とつまらないのよ？ だって、最近はもつぱらあわき淡希をいじるだけ

しかないもの」

「いや、十分楽しんでるだろ……」

淡希とは、学園都市暗部組織『グループ』の構成員の一人、むすじめあ結標淡希わきの事である。

標結は風飴の遊び相手（少なくとも結標本人は拒否している風だったので、風飴が勝手に遊びにいってるだけ）なのであった。

「で、本当は何の用なんだ？」

「うーん？」

運命が問うと、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりの表情で風飴は言った。

「別に、気になったから見に來ただけ。特に運命の女性関係について……」

「……聞いた僕が間違ってたのかもしれない」

「では早速、お前のクラスだが……」

「いや、喋らないよ？」

「ええーっ」

「ええーっ、じゃねーよ。早く帰れ」

「僕は、そこはかたなく帰らせる体を装って、疑惑の中心からなん

とか会話の方向

を変える事が出来た。いやあ、危ない危ない」

「そんなモノローグ思っちゃいねえよ!」

「真に受けるなよ、つまらんだらう」

運命はすっかり心中荒れ果てた様子で、もはや諦めて風飴に再度言
った。

きつと拒否されるだろうが、今の運命に言える事はこれくらいしか
ないのである。

「頼むから今日は帰れ。様子見をしに来るなら、前もって連絡を入
れる」

「べつ、べつにアンタが心配で来たわけじゃないんだからねっ!」?

「安いツンデレだな、おい」

「聞き分けのない子にはこうだ」

「ふん、甘いな」

言うのが早いか、風飴は対面のソファに座っている運命にドーンと体
当たりをかまし
てきた。

もちろん運命も予期していたので、軽くかわして風飴を抑え込み
にかかると。

風飴はこういうのに失敗すると、暴れだす習性がある(美人でスタ
イルもいいが、

案外感性はお子様なため)のだった。

普段からこういう事をしてくるので、その対処は手慣れたものだ。

「せんぱーい、ここですかー?」

「こら上条、ノックくらいしなさい!」

「ええー、それくら……いい?」

ノックもなしに応接室に入ってきた上条がそこで見た物は、（客観的に見て）上条たちの知らない霧ヶ丘女学院生を押し倒す我が校の生徒会長、鈴道運命の姿だった。

小萌先生に聞いたところ、来客があったので応接室にいるだろうとの事だったので、もうお客さんも帰っているだろうと考えた上条は、何の気兼ねもなくドアを開けたのだが、運命にとっては最悪のパターンだった。もはや定番のパターンと言っても過言ではないが。啞然とする上条たちに、さらに追い打ちをかけるように風飴は言った。

「私と運命は取り込み中だ。出直して来い」
「は、はいっ！」

ガチャ、ドタドタドタ。
慌てて走り去る足音が聞えなくなるのを確認した運命は、依然として同じ体制のままがつくりとうなだれた。
ああ、僕の高校生活もここまでか……。今思えば、意外と短い三年間だった。
などと走馬灯のように次々と思い出が浮かんでくる。
だがそんな回想も、自分の下から聞こえてくる声に中止せざるをえなくなる。

「おい、重いぞ。早くどけ。そもそも私の上に乗っていいのは、私が心を許した十八歳以下の乙女と決めているのだぞ？」

「まさかの百合属性!?!」

「あ、それから、さっきの後輩?がその隙間から見てるぞ?」

「はっ……!?!」

入口のドアを目を凝らして見ると、少しばかり隙間が空いているのが目に入った。

その隙間から覗く五人分の視線が、グサグサと運命の心を射抜いた。わなわなと震えた運命が、最後の気力を絞って言った。

「……こういうのはどうかと思うが、言わせてもらおう」

すーっと息を吸い込み、運命は心の底から叫んだ。

「不幸だ——————!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

この番外編が一番文字数がかかりました。

この作品は、竜王さんとやらせてもらっているのですが、竜王さんと違い、私は小さくまとめるのが不得意なのでそこはご容赦を。

今回は、またもや魔術結社とのバトル展開を導入する予定です。

そろそろ決着をつけないと、次に進めませんからねえ……。

あ、あと毎投稿ごとにどこかしら文調に変化があると思いますが、それはその時読んでいた小説に感化されたのだと思ってください。

これでは執筆者失格ですかね……。

すみません、気を取り直していきます。

感想・コメントなど、いつでもお待ちしております。

それではまた次回に。

どうも、刀鍛冶です。

ようちやくの投稿です。

これ以外にも、「the Night of Knights」や
いろいろを新しく始めたので……

ぜひ読んでみて下さい。

では、本編へどうぞ。

第六章 天界への門 Road | To | Innocent | Garden .

学園都市第七学区 病院、とある一室。

そこでは、二人の男女が言い争いをしていた。

一人は、白い修道服を着た少女。

もう一人は、ツンツンした髪が特徴の、今は患者服を着た少年。

「あー！ まだ起きちゃだめなんだよ！」

「ダイジョーブだってこんくらい。俺がケガして元気じゃなかった事なんて、な

かったでしょうが」

「とうま、おなかに穴が空いたんだよ！？ 普通だったら死んじやつてたかも！」

「こらこらインデックス。病院では静かにしなさい。これは社会の常識ですよ？」

「とうまもそろそろ、看護される人の常識を知った方がいいかもっ！」

少女の名前はインデックス。

その脳に、一〇万三〇〇〇冊の魔道書を持つ少女。

少年の名前は上条当麻。

その右手に、異能の力ならば、超能力や神の奇跡であろうと打ち消す力を宿した、

不幸な少年。

彼らの住む世界は、絶対に相容れぬはずであった。

しかし、何の因果か運命が交わってしまい、今は生活を共にしている。

なぜ彼が入院しているのかというと、上条は「神の御名において示す正義」との戦

闘で重傷を負ったためだ。

ひなげしくりゆう日無消紅竜助けるため、槍型の霊装の一撃を受けたのだ。

上条は、臆げながらもその時の事を覚えていた。

「（先輩に迷惑かけたかな……）」

「とうま、何か言った？」

「いや、何でもねーよ」

「えー、なんか隠してるでしょ？」

「おいおい、そんなに寄るなよインデックス。ちょっと重いぞ？」

「なっ！？ とーうーまー！ レディに対してそれはないかもっ！

！」

「いったー！ー！？ イ、インデックスさん！？ なぜ頭に噛み付くんですか！？」

「私めが何かしましたかー！？ ていうかコッチは病人だぞ！？ 重

傷だぞ！？ 峠を

越えて帰ってきたばかりなんだぞ！？」

「とうまが、モゴモゴ。悪いん、モゴモゴ。だからね！」

「噛み付きながら喋るなあああー！！！！」

「……なんか消毒くさいかも」

「人に噛み付いておいてそれかー！ーっ！？」

正直どつちが騒いでるのか分からなくなってきた上条は、事態の収拾をつける事に
した。

とりあえずインデックスをなだめ、ベッドからずり落ちそうな体を起こし、それに

伴いずれたシーツを正しく直した。

そんな様子をどこからか見ていたのか、病室の扉がタイミングよく

ノックされた。

「はい、どうぞ」

上条はすぐに応え、病室に招き入れた。

「無事か、上条」

「あ、鈴道先輩。はい、もう元気ですよ」

「とうま、だれあの人？ ていうかいい匂いがするんだよ！」

「ああ、見舞いを持って来たんだが……」

訪ねてきたのは鈴道運命りんとつたためだった。

彼が上条の見舞いにすぐ来なかったのは、先の戦いで不注意により上条を

巻き込んでしまったうしろめたさからだろう。

上条は自ら首を突っ込んだ事を自弁しているので、運命がそんな感情を抱く事はあ
る意味間違いだ。

しかも、上条は保護の手から自ら抜け出したのだから尚更だ。

運命はインデックスに見舞いの品を渡すと、上条はカエル顔の医者
の元に行くよう

インデックスに告げた。

そしてインデックスがいなくなると、運命は深々と頭を下げた。

「……先輩が気にする事じゃないですよ」

「しかし……」

「勝手にでしゃばったのは俺ですから。それに先輩達が助けてくれ
なかつたら、俺
死んでました」

「そう、か……」

「お礼を言わせてください」

運命は躊躇^{ためら}ったが、上条の真剣な眼差しに礼を受け取った。

学園都市某所。

紅竜は一人、黙々と修練していた。

研ぎ澄まされた感覚、無駄のない動き、そして圧倒的な破壊力。

その場の、紅竜を中心とした半径十メートルには跡形もなく、ただぽっかりと地面

に穴が穿^{うが}たれているだけだった。

まるで、奈落へと繋がる門のように。

「おおー、荒れてるわね」

「仕方がないですよ。彼の責ではないとはいえ、一般人を巻き込んでしまったのですから」

「上条当麻は一般人の括^くりに入るのか？」

「……人それぞれじゃないですかねえ？ 僕にとってはただ『幻想^{イマジ}プレイカー^{カー}』を宿す少年

なんですけど」

「観点の違い、か……」

それを少し離れたところで静観する影が二つ。

断離^{たつり}風飴^{かみめ}と珠洲^{すず}乱夜^{らんや}継^{つぐ}の二人だ。

冷静に見ているようで、二人は共に自信を叱責^{ちせ}していた。

あと十分、いや、あと五分早ければ……。

この戦いに終止符も打てたのかもしれない。

風飴はともかく、夜継は頭も良く回転も速いので、感情に流される事はない。

一方の風飴は、紅竜という象徴すべき感情派がいるので、逆に冷静になってしまったのだ。

「今夜も奴等は来ると思うか？」

「ええ、昨日の口ぶりから推測するに、相手方もそろそろ本気なのでしょう。別に

今までが本気ではなかった、というわけではないのですが」

「さすがに今度は、私達も最初から能力全開^{アクセル}ってわけね？」

「ええ、もう四度目はありません。完全に潰します」

ここまでの戦い、次は三度目の衝突なのだが、今までの二度とも相手が身を退く形に収まっている。

だが、彼等にしたらって長引かせるのは都合が悪いはず。

このままズルズル長引いても、学園都市にわざわざ猶予とも呼べる期間をあたえる事になる。

ならば一気に攻め立ててしまえば効率がいい。

夜継はそこが引つ掛かって仕方がなかった。

スピードの勝負。

学園都市の技術では、未知の力である魔術に対応しきれない。

だが、学園都市には『イギリス清教』という強力なバックグラウンドがいる。

長引けば介入を許してしまう事だろう。

なぜ退いた？

疑問は絶えない。

しかし、時間は刻一刻と過ぎ去って行くのである。

日本国内。

「ここか？」

「はい、主教様」

「うむ、よいところだ。私の生まれ故郷とは格が違う」

「ですが……」

「ああ、ここももうじき私達の物になる。くくつ、フレステイアーズ神の片鱗。奴を
手に入れればな」

「おお、主よ。加護を与えたまえ」

同時刻、学園都市に一人の『禍』が降り立った。

漆黒の衣を身に纏い、獰猛な笑いは身を竦ませるほどだ。

隣には、シアーストックリューネルの姿も見られる。

「神の御名において示す正義」それがこのマジックキャバル魔術結社の名だ。

彼等が学園都市に来るのは三度目。

一度目も二度目も邪魔が入ってしまった。

だが、それによる収穫の方が大きかったのだ。

「さて、ゆくぞシアーストよ」

「はっ」

「今宵は月が美しい」

「はい。今日は満月です」

「おお、丁度よいではないか。私の魔術と月は相性がいい」

「いい『門』が開けるでしょう」

「くくつ、くはははは！」

漆黒の衣を纏った『禍』は高々と笑った。

だが、月に照らされたその姿はとても美しかった。

学園都市某所。

そこにはすでに運命も来ていた。

しかし、どことなくその顔には驕りが見受けられた。
まだ罪悪感に苛まれているのだろう。

「やはり、奴らは来たようだ。さきほど警備員アンチスキルから連絡が入った。
何者かが壁を破
壊、侵入したとな」

「予想通りですね」

「ちやちやつと片づけましょう？」

「今度こそ決着をつけてやる」

三人とも決意はすでに固まっているようだ。
その眼には力強い光がこもっている。
こんな敵、通過点に過ぎない。
そんな表情だった。

「ああ、行こう。決戦だ」

宣言した運命には、もう驕りは見えなかった。
もはや運命の眼も「神の御名において示す正義」にしか向いてい
なかった。

そして両者は決戦の地へ

学園都市某所、工場跡。

「今夜は早い到着ですね、鈴道運命」

「ああ、そりやどうも、シアースト「クリューネル」

まず戦いは膠着状態に入った。

数では「神の御名において示す正義」の方が圧倒的に有利だ。

だが、個々の戦力差においては運命達「クラウン」の方が上だとい
う事は一目瞭然

だった。

各々が無双の力を秘めている「クラウン」の前では、数など取るに
足らない。

しかし、相手もあくまで魔術師。

こちらの弱点を上手く突いてくる。

「ぐおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

奥では紅竜が暴れ回っている。

彼が背にもつ三対の翼の破壊力は唯一無二、無双無比。

「ブラッククリア
聖なる漆黒」

たとえ蟻の大群のように群がって来ようとも、怒涛の嵐の前ではた
かが知れている。

「はあっ！ 疾ッ！」

シアーストと睨み合う運命の近くには風飴がいた。

彼女の能力は「ルインスファイア
烈圈法則」。

莫大な身体能力を得、物理の法則を無視した神懸かりな亜法則を行

使用する事が出来る。

もはや無重力空間にいるようにも見える。

「ふん、そつちでいいのか？ よつと」

狙われやすいはずの高台には夜継がいる。

彼の能力は「慈悲深き罰」ザ・アフエクティブ。

相手の位置や動きを三次元的に捉え分析、そしてより有効な遠距離攻撃を強大な威力で撃ち出す。

見た目や基盤は魔術に似ているが、本質はまったく違う力や法則により発動している。

「神の御名において示す正義」は「クラウン」のメンバーの圧倒的な戦力の前に、早く

も敗戦の様相を呈してきた。

しかし、そんな状況も一つ要素が加われば傾いてしまう。

そんな現実を突き付けられる瞬間が、今まさにやって来た。

「なかなか面白いではないか」

好戦の雰囲気の中現れた、得体の知れない感覚。

まるで、わざと歪めた物を見せられたような感覚。

紅竜よりも強く、ひしひしと肌を感じる殺気。

「ッ、誰だ!？」

運命は、思わず目の前にいるシアーストの存在も忘れ、振り返った。

そこにいたのは少女。

背丈は一五〇後半から一六〇前後。

瞳の色は青で、髪の色は銀だった。

そして身に纏うのは、漆黒の衣。

右手には、背丈とほぼ同じ長さの杖。

容姿は「美しい」という表現が最も適しているだろう。

しかし、その表情はどこか恐ろしく感じられた。

「私も混ぜろ、神の片鱗を持つ者よ」

「ちっ、ふざけるな！」

運命は左手に「スラッシュ一心一刀」を現出させ、真一文字に薙いだ。
しかし、少女に当たる寸前で何かにかき消された。

「な、何だ？」

「礼儀を習わなかったのか？ それでは、高が知れるぞ？」

尊大な口調だが、不思議と少女には合っていた。

「私は『神の御名において示す正義』主教、クレス＝ミストルーテ
イン。貴公キウキウを貰いに
来た」

「誰がお前等みたいなのに貰われるか！」

くくつと笑い、クレスは続けた。

「私と共に歩め。そうすれば貴公も理解するであろう」

「断ると言ったら？」

「その時はその時だ。力づくでも本国に連れ帰る」

「そうか……」

運命は俯き、いくつか呟いた。
そして顔を上げ、言い放った。

「無理だ、断る！」

クレスは驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んだ。
そして運命に言った。

「なら、決裂だな。力づくでも連れ帰るぞ」

「はんっ、望むところ！」

そう言うが早いか、運命は「一心スラッシュ一刀」を振り下ろした。
しかし、それはクレスに当たる事はなかった。

彼女は避けなかった。
いや、避ける必要がなかった。

「地在るところ 煌々たる天界の門 今開かれん」

クレスが杖を掲げ言葉を発し終わった直後、辺りは白い光に包まれた。

今回は少し話が進みました。

名前ストックってこういう時便利ですね。

ここだけ？の話、「生徒会に心得なしっ！」は勝手ながら打ち切ろうと思っっています……

実は他に何本か書いていて、そちらにネタなどを回したいと思ったのです。

こんな話もなんですが、そっちは書き溜めた秘蔵文書なのでちょっと自信ありなのです。

近々投稿するかもしれませんが、よしなをお願いします。

感想・コメントなどいつでもお待ちしております。

それでは、また次回お会いしましょう。

「　っ!？」

クレスが言葉を発した直後、彼女を中心に生まれた莫大な量の光の奔流に飲まれ、運命さだめは目標を見失っていた。

しかし躊躇う事無く、運命は振り下ろしつつある刀とう　『一心いっしんこっ』
刀とう』を振り抜いた。

当たった感触はない。

だが、躊躇して行動が遅くなるよりはいいだろうと判断した結果だ。

ただの目眩ましにしては光量が多すぎる上、光に包まれる瞬間に運命はその目で見たのだ。

クレスが冷徹な笑顔を浮かべるのを。

振り抜いた刀を構え直しつつ、運命はほぼ真後ろに跳んだ。

考えていた通り、さきほどの光は目眩ましというわけではなかった。

しかし、劇的な変化がそこには生じていた。

「……………一体どうなってる」

運命が目の当たりにしている光景を見れば、例えどんな人でも同じような事を口にしただろう。

一つは空中、純白の羽が辺り一帯に舞い散っている。

もう一つは眼前、光に吞まれる直前まで対峙していたクレスのちよつと真後ろ。

そこに聳える巨大な白銀の扉、そしてそれに続く直線の階段。

その光景には驚きしか生まれなかった。
先程まであんなものはなかった。

……これは、やはり魔術の成せる業なのか。
運命は思ったが口にしない。

そして、その視線は門の前に佇む彼女の姿に注がれている。

その背には純白に輝く三対の翼。

十センチ程離れた頭上には、光る輪がある。

絵の中に描かれているような、まさに天使然とした容貌だ。

クレスは静かに、しかし冷徹な笑みではなく、優しげな微笑みを

浮かべて言う。

そこには尊大な、そして泰然とした雰囲気はあまり感じられなくなっているが、しかし運命は微笑みの中に息苦しいような圧迫感を感じていた。

「『契約の天使』、『天の書記』、『小Y H W H』。数々の呼び名があるが、一番相応しい名は『神の代理人』だと私は思っている」

「神の代理人、だと……？」

「ああ。貴公、天使を見た事はあるか？」

「ふざけているのか？」

運命の問いかけにクレスは答えなかったが、浮かべる微笑みを崩さずに言葉を紡ぐ。

「天使とは、天よりの使者を指す言葉だ。もつとも、その天使自体に意思はないがな。奴等は神の作った玩具おもちゃに過ぎぬのだよ」

「だったら、僕の目の前にいるお前の姿は何なんだ。『私が天使だ』とでも言いつつもりか？」

「ふむ、そうであったらなかなか愉快だな」

だが、とクレスは続けて言う。
多少おどけているのは、「ご愛嬌といったところだろう。

「私は一介の魔術師　いや、人間に過ぎん。そもそも、通常は天使が人間の前にその姿を見せるといふ事は滅多にあるものではない。同じ界に存在しているものの、位相は異なっているのだ。例えば神話などに見られる天使などは、大体において人間界側にある丁度好い器　つまりは人に身体を借りて代行顕現しているのだ。よくいるだろう、『神からの命を受けた』などと言う輩が。それは、一時的に天使に肉体を貸していたゆえ、己が言われたと勘違いしているのだ。あとはそうだな、『^{ステイクマ}聖痕』と呼ばれる傷が現れる人がいるだろう？　あれは、天使に身体を貸した時に出来る傷の事だ」
「御託はいい。早く結論を言え」

言葉を差し挟みつつ睨みつける運命に対し、クレスは再び微笑を浮かべながら言う。

「結論はさつき言ったぞ。天使に私の肉体を貸してやっているのだ。まあ、正確に言うならば、私が力を借りているのだがな」
「待て、お前はさつき『位相が異なっている』と言わなかったか？」

この運命の疑問に対し、クレスはしたり顔で言葉を返す。
少々腹が立ったが話が進まないと考え、運命は大人しく話を聞く事にし、耳を傾けた。

「それだがなあ、ほれ、この羽あるだろう？　この羽は言わば供物、贄だ。天使がこちらの位相に同期し易く、そしてここら一帯を天界に近い空間にするためのな。そしてこの門は……と、わざわざ教えてやる必要もないか」

「最後まで言えよ。ここまで付き合っただけでやったんだ、その位の駄賃

は欲しいな」

「ふむ、駄賃か……、その表現は悪くないな。よし、特別に教えてやろう。さあ、有り難がるがよいぞ。何なら私の従僕として傍に置いてやらん事もないが……どうだ？」

先程まで嬉々として話していた事は全く忘れていいのか、クレスの顔から微笑みは消えている（しかもどや顔）。

態度も口調も、最初と同じ尊大なものに戻っている。

……こいつ、ふざけているのか？　ここに来た目的も忘れてるんじゃないのか？

運命の中の胡散臭さメーターが、振り切れる寸前まで上昇したのは言うまでもない。

最早目的の内、腹八分目といった顔でクレスは話し始める。

「まあ、あの門だが、実際ある意味はない。ハッキリ言うとインテリアだな、アレは。天使を降ろす術式『天界への門』インセント・ゲートと言うものを使っているのな、門がないと何となく示しがつかんだら？」

「……、……」

命は呆気にとられ、山程あるツッコミを一つも言えなかった。

一方のクレスはというと、腰に手を当て、あまりあるとは言えない胸を張ってふんぞり返りながら笑っている。

一通り笑い終え、一息おいて呼吸を整えると、クレスは静かに運命に視線を向けた。

彼女は、運命が最初に感じた鋭い殺気と、異常な重圧感を再び身に纏っていた。

「貴公、サダメと言ったな。最後に、もう一度だけ問わせてもらう

サダメ、私と共に歩まぬか？」

「最初にも言ったが　無理だ、断る。お前等のような『悪』とは

同じ道を歩めない」

そうか、と短くクレスは答えた。
瞬間、二人が相對するこの場に緊張感がどつと溢れ出す。
来る、運命はそう感じた。

しかし、以外にもクレスはすぐに向かつては来なかった。

「本当の最後に、一つだけ言っておく」

「……何だ？」

「私が降ろした天使の名は　メタトロン。七六の異名を持ち、神の側近でもある大天使だ。　私も扱いが慣れていないから手加減は出来ない」

だから、と笑みを浮かべる。

「くれぐれも焼け焦げぬように抵抗してくれ」

神々しく輝く三対の翼が、ゆっくりと左右に広がってゆく。
その全長は、目測にして六メートル。
それに合わせて運命も一心えもの一刀を構える。
どんな攻撃が来るかは未知数の上、相手に自分の情報は筒抜けだ。
状況は不利と言っていいだろう。

しかし、運命には焦りも油断もなかった。

対峙する両者が近づく事はない。

クレスは運命の攻撃の間合いを知っているし、運命はクレスの攻撃の間合いを知らないが故、近付かずに出方を見ている。

羽撃はばたく、そう運命が思った瞬間にはクレスの姿は消えていた。

……上か！

僅かな風の流れを感じ、一瞬で己の行動を決断する。

運命は、右手の方向に思い切り跳んだ。

先程まで運命のいた地面は十字型に三メートルほど抉れ、一部は融解していた。

……思った以上に範囲が広い!?

地面を溶かすほどの熱量ならば、人間を丸焼きにするのは簡単だ。近付かなくては当たらない攻撃範囲を持つ運命にとって、遠距離からの攻撃ほど厄介なものはない。

思い運命は、己に出来得る限りの跳躍で三階建ての廃ビル屋上に壁を伝って昇った。

しかし長居する事はなく、一瞬だけ周囲を見て確認する。

……上空、今いるビルよりも高い位置、大体五メートルつてところか!

視認するためにビルに身を預けたほんの一瞬の間に、運命の足場であったビルは轟音と共に倒壊した。

運命がクレスと戦闘を繰り広げる一方、『クラウン』のメンバーである紅竜、風飴、夜継も『神の御名において示す正義』の魔術師達と交戦していた。

当初は戦況は紅竜達に傾いていたが、シアーストが加わってからというものの防戦に回る事が多くなってきていた。

……くそ、運命の方でも派手にやってるみてえだが、コイツ等一体どうなってやがる!?

紅竜の疑問も当然だ。

シアーストが加わる前まで、圧倒的に戦況を押ししていたのは紅竜達だった。

しかし彼が加わってからというものの、攻撃・防御・連携のどれを取っても紅竜達に勝るとも劣らぬ状況になってきている。

……そんだけ野郎が出来るって事か　面白れえ！

紅竜は嬉しさを表に出すように、犬歯を剥き出しにした獰猛な笑顔を見せる。

その笑みを交戦の合図と受け取ったのか、シアーストは剣を構えた。

シアーストとの距離は二〇メートルほどだったが、紅竜は気に留める事もなく猛然と突撃してゆく。

月の光を吸い込むような漆黒の翼を震わせ、一〇メートルに近付いた獲物へ向けて翼を薙ぐ。

シアーストはそれに対抗し、両手で持つ剣を薙ぐ。

二度、三度と繰り返し返して攻撃を仕掛けるが、双方実力が拮抗しているためか戦局は動かない。

そしてどちらからともなく、二人は間合いを取る。

「オマエ、口だけの野郎じゃなかったんだな」

緊迫感が漂う中、紅竜が先に口を開いた。

この言い種にシアーストは全く動じなかった。

だが、少し、しかし威圧感は保ったまま肩の力を抜く。

「そう思って頂けたのなら光栄です。しかし、なぜ貴方は距離をとったのですか？」

「？　間合いを取るのは戦術の基本だろう？」

「それは接近戦の基本でしょう？」

間を置いて。

「私がいつこの霊装で遠距離攻撃できないと言いましたか？」

言い終えた瞬間、シアーストは手に持つ霊装を紅竜に向かって投

擲した。

翼を身に巻き付けるように畳み、全力で身体を右に擦った。

ヒュン！

という風を切る音と共に、紅竜の左真横スレスレを通り過ぎていった。

ほとんど本能で避けたようなものだ。

先にあつたシアーストの発言がなければ、実際どうなっていたか分からない。

全身から嫌な汗を噴き出しつつ、紅竜は瞬きすら惜しんで対峙するシアーストを見続ける。

……次に目を離したら、確実に当ててくる！

いつの間にか霊装はシアーストの手に戻っている。

霊装を持ち直しながら、シアーストは口を開いた。

「一つ、お教えしましょう。私の持つ子の霊装

ミスファイルティン
光の神を討つ剣

は、剣であり矢でもある霊装なのですよ」

「……、……」

「私としては距離を取ってくれても構いませんし、逆に詰めてもらっても構いません。どちらでも、私にとっては都合がいいですからね」

「……、……」

シアーストの話は嘘ではないだろう。

先の一戦で、紅竜自身も身をもって知ったのだから。

シアースト自身の言葉がなければ当たっていたであろう攻撃。

普段ならば、奇襲だろうと避けるに値しないほどの威力しかない攻撃を受けてきた。

しかし、紅竜の本能が叫んでいたのだ。

この攻撃は避けるしかない。

避けなければ、死のみだ。

と、そう叫んでいた。

紅竜には接近戦ショートレンジだろうが遠距離戦ロングレンジだろうが、絶対に誰にも負けな
いという自負があった。

それだけの能力Strengthを紅竜は持っているのだ。

どちらか一方だけという敵は今までいくらでもいた。

両方という敵は少ないまでもいたが、総力で見れば実力は紅竜よ
りも数段下の敵しかいなかった。

これほどまで紅竜と同等の力を持ち、剩あまつえその力を遠近両の攻撃
を行使できる敵は今までいなかった。

そんな状況においても、紅竜は獰猛な笑みを浮かべたままだった。
まさに、紅竜に相對するに相應しい敵が現れた瞬間だった。

そんな紅竜の狂喜の笑みをただただ冷静に見つめながら、シアー
ストは言う。

「……貴方、非常に狂ってますね」

「ああ」

「我々にとっての危険因子ですね」

「ああ」

「という事は、排除した方がいいですね」

「ああ　ここからが本当の勝負だ！」

その紅竜の叫びを皮切りに、臨戦態勢へと入ってゆく二人。

両者とも直線で一気呵成に間合いを詰め、己の剣と翼を交える。

二つの戦場で、それぞれが決着の時を得ようとしていた。

久し振りとは呼べないほど久し振りの投稿になります。

久し振りすぎて書き方が変わっているかもしれませんが、その所は
ご了承してもらえると有り難いかと。

それと、前書きはなしの方向で行きます。

どうぞやら向いてないようなので。

とある青年の裏方作業、続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1070s/>

とある青年の裏方作業(ハードワーク)

2011年12月11日18時53分発行